様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　1 日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520654
研究課題名（和文）　環大西洋史から捉える人の移動と疫病

研究課題名（英文）　Migrations and Epidemics in the Modern Atlantic World

研究代表者
山田　史郎（YAMADA SHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：30174717

研究成果の概要（和文）：
本研究は、近代大西洋世界における移動する人々と疫病の関係を、病気の社会史と環大西洋史の概念・方法論を用いて考察した。とりわけ、19 世紀アメリカ合衆国におけるアイルランド人移民が、祖国での飢餓と疫病の記憶を継承し再構築するなかで、ディアスポラ集団としての自画像をアメリカの人種秩序のなかで鮮明にしようとした過程を把握できた。3 人種が交錯する大西洋世界を背景にした、移動民と疫病の関わりを考察する事例研究となった。

研究成果の概要（英文）：
From the standpoints of the social history of diseases as well as Atlantic history, this project has investigated migrants and their experiences of epidemic diseases in the modern Atlantic world. It specifically illuminates how the Irish diaspora in the nineteenth-century United States established their self-portrait as exiles on the basis of their memory of hunger and disease in their homeland. This is a case study of the relationships between migrations and epidemics in the Atlantic world in which three races encountered with each other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：西洋史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：伝染病・移民・大西洋・アイルランド・記憶・アメリカ合衆国・飢饉

１．研究開始当初の背景

背景として、研究代表者による、次の２つの領域における研究成果の蓄積があった。

（１）アメリカ合衆国建国初期の首都フィラデルフィアにおける黄熱病流行と活字文化の興隆

この研究において、憲法制定期に成立した激しい党派対立を背景として、人口の１０％近くを死に至らしめた黄熱病流行の原因について、徳を失った社会の腐敗やハイチ黒人革命の影響など、多種多様な見解が現れる中で、患者救済に立ち上がった新興のアイルランド人出版業者のイデオロギーを分析した。本研究を通じて、疫病の流行と対策が、ナシ

ョナリズムの言説と結びついて政治的意味合いを持つことへの視点が切り開かれた。【山田史郎、「黄熱の首都フィラデルフィア」金井光太朗他『常識のアメリカ　歴史のアメリカ』（木鐸社、１９９３年）所収】

（２）アメリカ合衆国におけるアイルランド人移民の結社

１９世紀を通じて大西洋を横断したアイルランド人移民は、英国の抑圧下に置かれ続ける祖国への支援と、米国の人種的民族的排斥にさらされる移民同志の相互共済とを目的とした種々の結社を結成した。この研究は、それらの結社をディアスポラ・ナショナリズムの表出と捉えるとともに、移動する人々のアイデンティティ形成における災禍の記憶の問題への関心を醸成した。【山田史郎、「アイルランド人移民と結社の政治」綾部恒雄編『クラブが創った国アメリカ』（山川出版社、2005 年）所収】

こうした研究代表者の問題関心と視点に加えて、近年における「大西洋史」研究が、アフリカをも含めた広域の西洋社会の展開を射程に入れて、従来の一国史研究を越えた成果を生み出してきていることも、本研究を開始するにあたっての重要な学問的背景となった。本研究との直接的関係で言うと、アルフレッド・クロスビーが、大西洋の両側で、病原菌の交換がどのようにして行われたかを興味深く概観している（クロスビー、『ヨーロッパ帝国主義の謎ーーエコロジーから見た１０～２０世紀』岩波書店、１９９８年）が、特に黄熱病に焦点を当てて疫病が環大西洋地域の人々に与えた衝撃の観点から植民地建設＝帝国の過程を把握しようとする J. R. McNeill の刺激的エッセー【"Yellow Jack and Geopolitics: Environment, Epidemics, and the Struggles for Empire in the American Tropics, 1650-1825," *Magazine of History*, 18:3（2004）】も、疫病を通じた海洋地域世界の形成を理解することの重要性に着目した。

こうした問題関心の背後には、フーコーの「生政治（バイオポリティクス）」の概念や、それを植民地帝国史研究に援用したアン・ローラ・ストーラーの研究（『肉体の知識と帝国の権力ーー人種と植民地支配における親密なるもの』以文社、2010 年）があり、性や身体への政治権力の浸透から植民地支配や異人種間関係を把握することの意味に強い関心が集まっていた。

２．研究の目的

アトランティック・ヒストリーが提唱するように、人・動植物・物品・思想・文化の移動と交換が行われたダイナミックな舞台として大西洋地域を捉えるならば、疫病も、東と西、北と南を行き交う人に付き従った重要な「交換品」であった。移動する人々は、出身地におけるどのような社会的、経済的、政治的背景のもとで、疫病や身体の問題を携えて出国するのか。移動の途上である大西洋の船上において、疾病は祖国への思いや移動先社会への期待にどのように影響するのか。移動民は移動後の社会において、どのような疫病や身体的危機状況に直面しながら、集団としての共同意識を育み、あるいは国民化への道を歩むのか。本研究の目的は、これらの問題を、アメリカ先住民・ヨーロッパ人・アフリカ人が遭遇し交錯した近代の南北アメリカにおける人種秩序の形成との関わりのなかで考察することである。

具体例として研究対象となるのは、1840 年代後半に甚大な飢餓の危機に見舞われるなかで、海外、とくに北米への移住を余儀なくされたアイルランド人である。出国・移動途上・北米到着時に、深刻な飢餓と疫病に襲われ、多数の死者を出した経験は、北米社会への定着後のアイルランド人とその子孫に、どのような影響を及ぼすことになったのかを考察する。

３．研究の方法

本研究は、まず環大西洋地域における人の移動と疫病の流行に関する時系列的な包括的概観を把握したうえで、北米北部、北米南部、カリブ海の 3 地域に焦点を絞って、移動民と疫病との関係と地元社会の対応について比較検討する方法を構想した。しかし後者に関しては、地域別に特徴を抽出することにおいて、時代性、移動民の種類の相違、地元社会の医療制度の多様性などにより比較がむずかしかった。そのため、実際には、大西洋を移動した人々と疫病について、より焦点を絞り、特定の集団に関する個別研究がもっとも意義ある成果を生み出す方法であるとの認識にいたった。

かかる観点から、身体との関係についてとりわけ重要な示唆を含む 19 世紀のアイルランド人について、祖国における飢饉とそれにともなう飢餓と疫病（主として腸チフス）をとりあげ、その社会史的な実像を再構成する（たとえば、1847 年に飢饉を逃れてカナダのグロッス・アイル島に流入した移民に関する同時代資料集 *Eyewitness Grosse Isle, 1847* などに基づいて）とともに、飢餓と疫病の体験が、越境したディアスポラの民にどのような生存戦略の道を選ばせることに役割を果たしたのかを検討した。具体的には、（１）アメリカ合衆国におけるアイルランド人移民新聞の記事（Gale 社が提供するオンライン新聞資料　19th Century U.S. Newspapers 所収の *Irish World* 紙）における飢饉・移住に関する政治的言説の分析、（２）移民の自伝的著述（ミネソタ大学移民史研究センター編纂のマイクロフィルム資料 American

Immigrant Autobiographies 所収のアイルランド人移民への聞き書き）に表れる飢餓・疫病・移住体験の分析、（３）主要亡命政治家の著述（たとえば、John Mitchel の *The Last Conquest of Ireland (perhaps)* や *Jail Journal*、Jeremiah O'Donovan Rossa の *Rossa's Recollections, 1838-1898* など）における飢餓・疫病体験と祖国ナショナリズム運動イデオロギーとの関係の分析をおこなった。

４．研究成果

（１）主として二次的研究を渉猟・分析することによって、17 世紀初めから 19 世紀末までの大西洋地域で生じた伝染病の全体的な見取り図を明らかにした。従来の研究においては時代や地域を限定した考察はあるものの、3 世紀にまたがる超域的な把握は未だ不十分であり、大西洋伝染病史のトータルな理解は、予備的作業として不可欠であるからである。申請者が所属する同志社大学には豊富な文献資料を有するアメリカ研究所があるが、とりわけ、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての時期に関しては同研究所が契約するウェブ上の印刷刊行図書データベース Early American Imprints と、19 世紀主要新聞データベース 19th Century US. Newspapers を用いて、黄熱病発生当時の状況の把握につとめ、伝染病関係の時系列データベースを構築した。本データベースは、諸手続完了の後、ウェブで一般に公開する予定である。

（２）大西洋世界における疫病の一事例として、アイルランド人移民の飢餓と疫病(主としてチフス)について検討した。19 世紀中葉から 20 世紀初頭にかけて、祖国における飢餓の状態を記述した在米の亡命ナショナリズム運動家たち(ジョン・ミッチェル、ジョン・サヴェッジ、オドノヴァン・ロッサ等)の言説を分析し、飢餓と疫病の発生原因をイギリスによる圧政に求める論点を抽出した。アイルランドからアメリカへの移住=ディアスポラが、飢饉と疫病の被害を記憶する移民に独特の心性を付与し、そのことが祖国独立に向けての暴力を伴う支援運動へとアメリカの移民を駆り立てる原動力となったことも明らかにした。また、多くのアイルランド人飢餓移民にとって北米での上陸地点となった、カナダ・ケベック市近郊のグロッス・アイル島では、到着後に膨大な数の移民が疫病で死亡したが、20 世紀初めに建造されたその慰霊碑が記憶の継承に果たす役割についても解明した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

1. 山田史郎　「境界に立つ社会史（書評）」『アメリカ史評論』26 号、56－60 頁

〔図書〕（計４件）

1. 小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史［近現代編］』（ミネルヴァ書房、2011 年）
2. 山田史郎　「読書する自画像－－建国期アメリカにおける巡歴説教師の自伝を読む」　松塚俊三・八鍬友広編『識字と読書－－リテラシーの比較社会史』（昭和堂、2010）、185－213 頁
3. 山田史郎　「アイルランドからの移民」駒井洋・江成幸編『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』（明石書店、2009）、246－259 頁
4. 山田史郎　「飢餓と追放と迫害－－アイルランド人ディアスポラと飢饉の記憶」金井光太朗編『アメリカの愛国心とアイデンティティ』（彩流社、2009）、65-83 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

山田　史郎（YAMADA SHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：30174717